

日本語における漢字および文字使用のしくみについて

石野 好一（新潟大学）

0. はじめに

シンポジウム「漢字文化とその周辺」¹において、日本語における漢字（さらには文字）使用に関わる種々の現象を説明するための仮説を提案し、さまざまな例を挙げてその論拠を示した。その主な内容は、すでに石野(1986)(2017)において述べたものである。したがって、本稿においては、その説明メカニズムを再確認した後、それをさらに拡張する仮説を提案したい。

1. 漢字系—音声系メカニズム

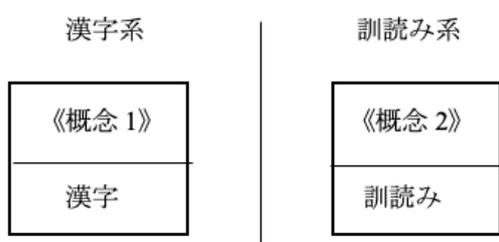
石野(1986)(2017)において、「漢字—音声—意味」という単一の言語記号系をやめ、「漢字—意味」の漢字系と「音声—意味」の音声系という2つの言語記号系を日本語に設定し、両系の交換（干渉）構造によって、言語使用や解釈が行われるというしくみを考えた。

1.1. 漢字系—訓読み系

すなわち漢字の体系と訓読みの体系を明確に区別する。漢字の体系を「漢字系」、訓読みの体系を「訓読み系」と呼ぶ。（この訓読み系は後に「音声系」さらに「仮名・音声系」として拡大される。）

これは(1)のように図式化できる。

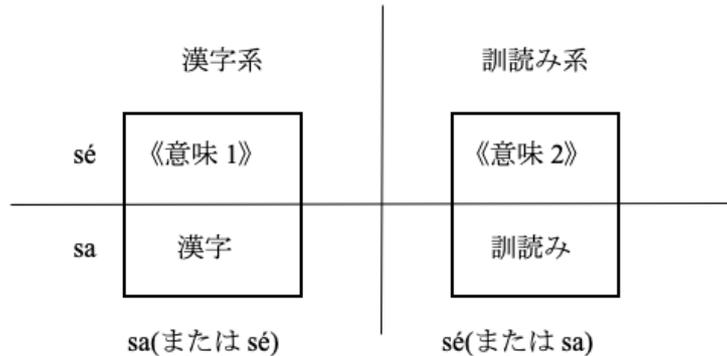
(1)



¹ 2018年3月16日、於岩手大学、岩手大学人文社会科学部創立40周年記念国際シンポジウム「漢字文化とその周辺」。この際の筆者の発表「日本語における漢字使用のしくみ」に対し、同席のシンポジウム発表者池貞姫、鋤田智彦、司会小島聡子の各氏、及び会場から貴重なご意見をいただいた。ここにお礼を申し上げる。

漢字系と訓読み系とはどう関係づけられ統合されるのだろうか。それを示すのが図(2)である。

(2)

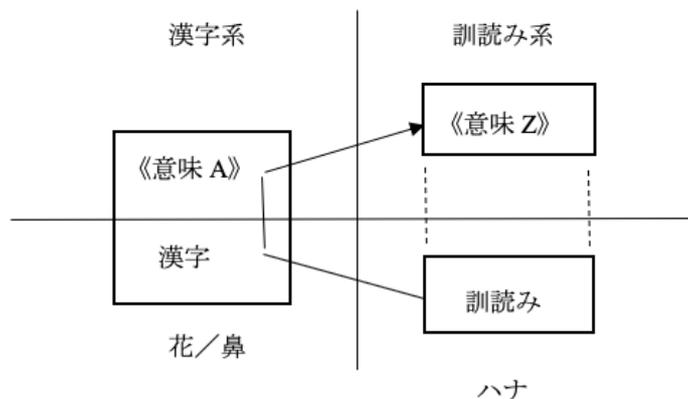


ここで、まず漢字系では漢字という記号形式（シニフィアン Sa）と意味 1 という記号内容（シニフィエ Sé）をもつ。訓読み系では、訓読みという記号形式 Sa と意味 2 という記号内容 Sé をもつ。このように、それぞれが独立した言語記号となる。

そしてさらにこれら 2 つの系は、一方が Sa で他方が Sé として結びつけられる。すなわち図に示したように、（垂直と水平の）二重の Sa-Sé 関係として、漢字系と訓読み系を規定できることになる。そして水平の Sa-Sé 関係は交換可能である。

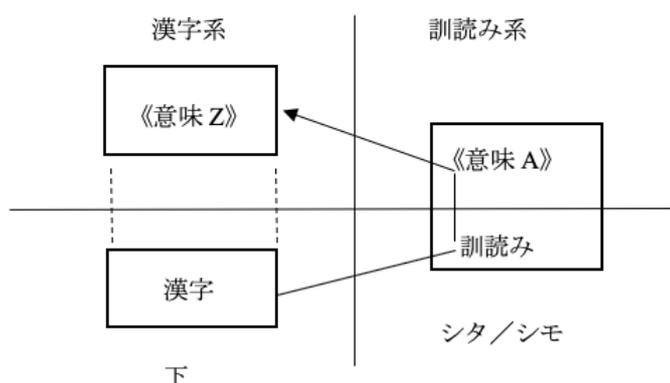
例えば(3)で示すように、われわれは音声（読み）[例えばハナ] だけでは意味 Z がとりにくい場合、どういう字を書くのか尋ねたり [花？鼻？]，文書化されたものを確認するなどして漢字（およびその意味 A）を意識する。つまり訓読み系 Sa から、漢字系 Sé へ移る。それによって、意味 Z に到達することが容易になる。

(3)



逆に(4)で示すように、漢字 [例えば「下」] をみてもその意味 Z が分からない時、その読みを聞く [シタ？シモ？]（すなわち訓読み系を経る）ことで意味 A から意味 Z へ到達し、その意味を理解することもある。

(4)



このように入口と出口の交換による記号系の相互干渉によって、訓読みの意味が決定されたり、漢字の意味が分かり易くなったりすると考えるわけである。この、2つの系の自立性と、それらの間の干渉現象が日本語の漢字使用のしくみの基礎となる。

もちろん、ふだんわれわれは漢字や読み方をいちいち尋ねるのではなく、文脈を利用している。つまり人の話を聞いたり本を読んだりしながら、並行して漢字や読み方を類推しているのである。それは、頭の中で常に2つの系の往復をしているのとほぼ同じことだと考えることができる。

1.2. 訓読み系から音声系へ

「訓読み系」は、訓読みに音読みを加えて「音声系」とすることができる。なぜなら、音読みの方にも訓読みで見られたような漢字との意味のズレがあるからである。

日本語の漢字には、その読みが中国から伝来した時代によって漢音、呉音、唐音と数種の音読みをもつものが少なくない。そしてその読みの違いによって意味の異なるものもまた少なくない。

例えば、「興」という字がある。/キョウ/と読んだ場合は「おもしろみ。おもしろく感ずること」などの意であり、それに対して、/コウ/と読めば、「おこる。はじまる。さかんになる。たち上がる」の意になる（どちらも『岩波国語辞典』）。ここから「キョウずる〔じる〕」（楽しむ）と、「コウずる〔じる〕」（勢いを盛んにさせる）という異なる表現もできている。これらの上位概念が「興」という漢字でまとめられると考えられる。

また音と訓とで意味が異なる場合もある。

例えば「風」である。/カゼ/と読めば自然現象を示し、/フウ/と読めば「様子、外見、様式」などを指す（「こんな風に」など）。

同様に「方」が/カタ/（人）と/ホウ/（方向）で使い分けられる（「役所の方」）。

それらと反対の例は、「獵」「漁」とその読み/リョウ/との関係である。ここでは、1つの読みに「獵」「漁」の2つの漢字が対応している²。

² 本来、「漁」の読みは「ぎょ」だったが、「獵」と意味が似ていることから、類推で「リョウ」とも読まれるようになった（『岩波国語辞典』）。つまり漢字の持つ意味の類似が音の同化を生

いずれの例も、漢字の意味と、読みの意味との間にずれがあると言える。漢字の意味と読みの意味が乖離していることを示すとともに、互いに干渉し合う可能性があることを示唆している。したがって、上述の図式と矛盾することなく、訓読み系に音読みを加え、音声系として拡張できるということになる。

1.3. 単漢字から文字連鎖への拡張

これまでの説明方法を文字連鎖にまで拡張することができる。

例えば、「五月雨（さみだれ）」という語は、文字（漢字）連鎖が1つの読み、および1つの意味をもっている。この場合、文字連鎖が1つの言語記号として、漢字系—音声系の一対一対応の図式をもつと言える。

しかし、中には、紅葉（「もみじ」「こうよう」）、二十歳（「はたち」「にじゅっさい」）、閑話休題（「それはさておき」「かんわきゅうだい」）のように、訓読み、音読みの両方が可能なものもある。これらではどちらで読むかによって意味に微妙なニュアンスの違いが感じられる。したがって、漢字系と音声系の意味対応に「下」「風」「方」などと同様の図式を見ることが可能である。

これらのようないわゆる熟字訓でなくても同様の状況は見られる。「工夫」には「クフウ」と「コウフ」という読みがあり、意味はだいぶ異なる。「大家」（「オオヤ」「タイカ」）、「牧場」（「マキバ」「ボクジョウ」）、「草原」（「クサハラ」「ソウゲン」）などでも訓読み系と音読み系で意味やニュアンスの違いが感じられる³。これらにおいては「興」と同様の図式による説明が必要になる。

拡張はそれだけではない。日本語には「コウセイ」（構成、更生、校正など）や「セイシ」（製紙、静止、制止など）のような同音異義語が多い⁴。

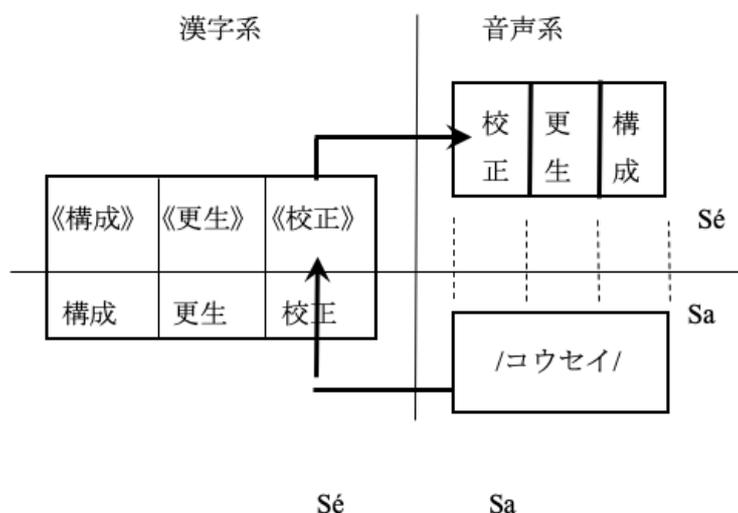
たとえば音声系「コウセイ」においていくつかの解釈の可能性がある場合、漢字系に移行して意味を絞ることで解釈を確定する。これは(5)のような図式で説明される。

じさせたわけである。これは漢字の意味と読みのもつ意味とが互いに自立しつつも干渉し合っていることを示す一例でもある。

³ これらの例は森岡健二他編(1975)から。その他に、「人気」に「にんき」「ひとけ」, 「地味」に「じみ」「ちみ」（土地の生産力）など。（中村明, 2014, p. 146）

⁴ 「同音語で一番多いのは「コウトウ」で、それは二四個ぐらいあるんです。（中略）高い「高等」もあれば、口で答える「口答」もあれば、いろいろある。その24個の「コウトウ」は、アクセントは全部平板、同じです。」（柴田武, 2002, p. 145）

(5)



日本語の運用においてわれわれは、漢字を想定することができない音声文字連鎖では1本の言語ラインを追っているが、漢字が想定できる部分になると、すぐに音声系－漢字系の分離を生じさせる。そしてそこまでの情報を参照しながら、意味の確定作業に入る。そこで確定できなければ、その後の文脈を聞き（読み）ながら、もしくは「それどういう字を書くの？」と尋ねるなどして確定作業を続ける。これが日本語の（そしてすべての言語における？）言語〔文字〕使用行為である。

2. ひらがなとカタカナ

以上が、石野(1986)(2017)および今回のシンポジウムにおいて述べてきた日本語の漢字・文字使用メカニズムの説明の骨子である。

ここでわれわれは、このメカニズムにさらに拡張を加えたい。すなわちこれまで音読み、訓読みをまとめて音声系としてきたが、ここでは書き言葉という観点からひらがな、カタカナという仮名文字に注目する。

2.1. 漢字と仮名

これまで、「1漢字－読み2つ」「1つの読み－2漢字」などという対応から、漢字系と音声系の両系においてそれぞれに異なる意味体系が見られることを指摘し、それを2系の主な存在根拠としてきた。

しかし書き言葉においてはさらに、漢字を使うか、仮名を使うかによっても意味（またはニュアンス）の違いが生じることがある。

例えば、樺島(1979, p. 88, pp. 161-162)は次のような例を指摘している。

(6) a. 出来る／できる

「出来る」：ものが作られたり，生じたりする意味

「できる」：可能の意味

b. 時／とき

「時は金なり」：時間の意

「早く帰ったときは」：形式名詞

c. 従って／したがって

「従って」：動詞「従う」

「したがって」：接続詞

d. 来る／（…て）くる

「来る」：移動を表す動詞

「（…て）くる」：補助動詞

[石野まとめ]

樺島は，これを「形式名詞，副詞，接続詞，感動詞には漢字を使わないことが多い。特に和語のそれらには使わない傾向がある。これは一種の意味による区別であり，表記に表意性を持たせる書き方だといえる。」（樺島，1979, p. 161）と説明している。

これは，ひらがなが和語に用いられることから，漢語に比べてその柔らかいイメージが浮き彫りになることを利用しているとも言えよう。

一方，カタカナは外国語，外来語の表記として用いられるのが一般的である。そこから次のような応用が可能になる。

(7) 早川氏／ハヤカワ氏

a. 早川氏の講演会が開かれる。

b. ハヤカワ氏の講演会が開かれる。

(7a)のように「早川氏」と書けば日本人の早川氏と考えるのがふつうである。それに対し，(7b)のように書くと，（外国の人名・地名はカタカナで書くという方針があれば，）「日系外国人のハヤカワ氏」と等しい意味が表記面から読み取れるという（樺島，1979, p. 111）。

また，地名についても，次のような使い分けが見られる。

(8) 広島／ヒロシマ

広島と書かずにヒロシマと書くことによって，「日本の地方都市名を超え，世界に向けての爆心地という特別な意味合いを帯び」るのだという。（菅井，2016）

しかしカタカナの利用はこの「外国性」だけにはとどまらない。

(9) 霜柱／シモバシラ

「シモバシラという名の植物があることを最近知った。真冬になると茎のまわりに氷が花のように咲く。...

凍結現象が専門で、舗装道路をも変形させる**霜柱**を分析し、三十数回訪ねたモンゴルでは永久凍土を研究した...

...地表の**霜柱**も、触れるほど顔を近づけると、その繊細な美がわかる。シモバシラもしかり。かがんで顔を寄せ、小さな宝石にしばし見入った。朝の日差しを浴びると、まもなく音もなく溶けて消えた。」（「天声人語」朝日新聞 2017 年 1 月 25 日）[太字強調は引用者]

動植物の名前はカタカナで書く習慣があるため上のような使い分けが可能になる。逆に、本来カタカナで書かれる外来語を漢字で書くということもある。

(10)a. カタログ／型録

b. クラブ／倶楽部

c. コンクリート／混凝土

これらの漢字表記からはそれぞれ次の解釈ができるという。（佐竹，2008, p. 173）

(10')a. 型録： 型を記録したもの

b. 倶楽部： 俱（とも）に楽しむ部

c. 混凝土： 混ぜて凝り固めた土

これは漢字によって音訳と意識を同時に行っているもので、カタカナの表面上の形式からは知ることのできないその語の意味を覗うことができる。

しかしときには「珈琲」のように意味不明な漢字の使用も見られる。宝飾品を表すこの2つの漢字が醸し出すゴージャスな雰囲気がこの当て字を許していると円満字(2017, p.28)は言う。

2.2. ひらがなとカタカナ

ひらがなとカタカナでもその使い分けによって意味の違いを示すことがある。

(11) カメ／かめ

「カメ」： 亀（動物）

「かめ」： 瓶（入れ物）

（樺島，1979, p. 88）

ここでも「動・植物名は片仮名で書く」という方針が利用されている。

(12)『アキラとあきら』（池井戸潤の小説のタイトル）⁵

ここでは、2人の登場人物の名前をひらがなとカタカナで区別している。これにより、2人が同名の別人（または別人格）であることがなんとなく示されるのである。

またオノマトペには、ひらがなとカタカナで微妙に意味が異なるものがある。

- (13)a. ぼつぼつ（現れる）／ボツボツ（穴をあける）
- b. ぼちぼち（昼どきだ）／ボチボチ（にきびが）
- c. どっぷり（暮れる）／ドップリ（漬かる）
- d. どんどん（進む）／ドンドン（たたく）

これを見ると、擬態語にはひらがなが用いられる傾向があると言えそうだ。それに対して、擬音語にはカタカナの方が向いている(13a,d)。この表記法は必ずしも規範となっているわけではないが、一般的傾向として共感は得られるのではないだろうか。

2.3. カタカナの特性

仮名の中でも特にカタカナの特性が指摘されることがある。

まず、強く、目立ちやすく、特殊なイメージがあるという。

カタカナのもつ特性について、専門家はどのように見ているのでしょうか。「日本俗語大辞典」の編著もある米川明彦・梅花女子大学教授に聞きました。

「カタカナ表記は、本来とは違うことを示します。カギカッコでくくらなくても、前後の言葉に埋もれません。強くて、目立ちやすい表記であり、特殊なイメージを帯びたりする場合があります。」（菅井、2016「隠語化される差別 カタカナの特性」）

（だから？）ネットの隠語やいじめ発言にカタカナが多く見られると菅井は言う。次に、カタカナはひらがなに比べ、音そのものを表しているというイメージがある。

ゴミがなぜカタカナ書きされるのかを考えようとするとき、他にどんなものに使われているかを調べるのがもっともいい方法である。

気をつけていると、これが結構ある。

バカ、アホ、マヌケなど。またメガネ、クシ、クスリ。アメ、カギ、ソバ。田中クン、高橋サン、カーチャン……。

⁵ 「零細工場の息子・山崎瑛（あきら）と大手海運会社東海郵船の御曹司・階堂彬（かいどうあきら）」。生まれも育ちも違うふたりは、互いに宿命を背負い、自らの運命に抗って生きてきた。……。ベストセラー作家・池井戸潤の幻の青春巨篇がいきなり文庫で登場!!」（Amazon.com の広告サイト）

...これらに共通するある傾向があつて、それは、これらが口語的であるということである。

口頭で言われることが多く、文字化されることがあまりない。俗語や生活に密着した言葉である...

...カタカナが音声をそのまま表していると言うことが出来る。考えてみると、擬音語は言うまでもない。外来語も、音として聞くので、カタカナで表される。

...カタカナが音を表記する、という仮名の分担がいつの間にかできあがっているということであろう。

ゴミは、音声で使われる言葉である。文字に書かれることがあまりない。それで、ゴミはバカと同じようにカタカナで表記される。(金田一, 2016, pp. 66-68)

同じ音節文字でもカタカナは、ひらがな以上に表音的なイメージがあるため、ふだんあまり書き言葉で使わない語にカタカナ表記が行われることが多いというのである。

また、カタカナは男性的だという指摘がある。

片仮名表記はもともとは漢文(とりわけ仏典の原語)を日本語に転換するときに主として日本語の助詞を「乎古止点」(ヲコト点)として使ったもので、その利用者は男性の僧侶でした。つまり、片仮名表記には男性のジェンダーがついていたのです。それに対して平仮名の方は「女手」と言われ、平安時代の教養ある女性たちが漢字をくずしながら女らしい柔らかな曲線の字形として考み出した表記法だと言われています(以→い、呂→ろ、波→は)。もちろん、漢字を読める少数の女性もいましたが、片仮名は男性用、平仮名は女性用というように、表記にジェンダー性がかかなり付着していて、そうした「認知の記憶」は今でも続いているように思われます。(牧野, 2018, p. 21)

さらに牧野は、カタカナはソト的で、共感性が低いという。

表記について言えば、平仮名表記が共感性が高く、片仮名表記が一番低く、漢字表記はその中間です。(牧野, 2018, p. 182)

共感性はウチ的、ソト的という概念と結びついており、ウチ的なものほど共感性が高いという認知的なとらえ方と結びついている。すなわち、外国語や外来語の表記に用いられることの多いカタカナは、当然ソト的であり、共感性は低い。

それに対して、和語の表記に用いられることの多いひらがなは、ウチ的であり、共感性は高いということになる。(もし「かふえ」という店があれば、ひらがなの持つそういう共感性を利用している可能性がある。)

こういったカタカナ(とひらがな)のイメージが、仮名の選択の動機づけになっていると言えよう。

3. 漢字系—仮名・音声系メカニズムへ

ひらがなかカタカナかという仮名の選択が、意味の違いに反映するということは、われわれの説明システムにとってとても重要なことである。つまり音声系の中にこれまで音読みと訓読みの選択があったように、書き言葉では、ひらがなかカタカナかの選択システムが必要だということになる。その結果、これらを統合するためには、音声系は「仮名・音声系」とし、全体は《漢字系—仮名・音声系》交換システムとする必要が出てくる。

ただし、対象を話し言葉に限定すれば、これまでどおり《漢字系—音声系》でほぼ問題はない。また書き言葉においては《漢字系—仮名系》とすることもあり得よう。

こうして、ようやく日本語の文字表記全体の使用メカニズムが統合できるわけである。その具体的な図式などについては、別の機会に展開したい。以下に残ったスペースを利用して、日本語の文字表記について興味深い指摘を紹介する。

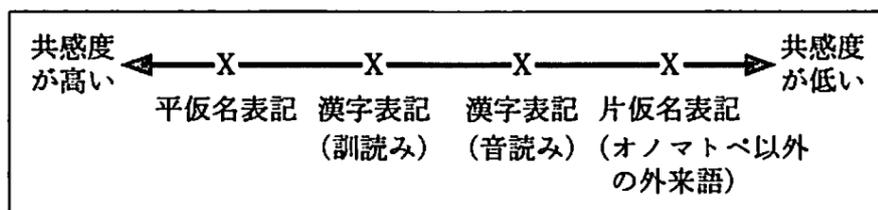
カタカナの特性の項でも引用した牧野(2018)は、日本語を外国語（とくに英語）に翻訳する際に何が消えてしまうかという問題意識から、翻訳の問題点と日本語の特徴について論じた。その中で日本語の文字表記全体について次のようにまとめている。

翻訳で消えてしまう日本語ならではの特徴として、訓読みと音読みの違いもあります。訓読みはウチ的読み方で、共感を持って人が近づく対象を表し、音読みはソト的読み方で、近づきたがらない対象を表しますが、それは両極化しているのではなく、連続体になっている（...）。具体的には、音読みと訓読みが対になっている「山（やま／サン）」とか「島（しま／トウ）」は音読みより訓読みの方が共感性が高い点などが挙げられます。表記について言えば、平仮名表記が共感性が高く、片仮名表記が一番低く、漢字表記はその中間です。このようなことは英語のアルファベット表記では表現できません。（牧野，2018, p. 182）

日本語の3つの表記法は「共感の階層性」の中でどのような相対的な位置づけになっているか、という問題に行きつくのです。

漢字で表せる語彙（意味内容）が平仮名で表記されると、日本語人にとって、それに対する共感性が相対的に高くなり、片仮名で表記されると共感性が相対的に低くなる傾向が強いです。また、ある意味内容が訓読みの場合は共感性が高く、音読みの場合は共感性が相対的に低くなります。（牧野，2018, p. 25）

牧野はこのように、表記をウチ的かソト的かという観点から分類し、ウチ的なものほど共感性が高いという認知的なとらえ方と結びつけている。その結果、日本語の表記法の間に次のような「共感のヒエラルキー」ができていくという。



(牧野, 2018, p.27)

4. まとめ

本稿では、シンポジウム(2018)において見た「漢字－意味」の漢字系と「音声－意味」の音声系という2つの言語記号系、および両系の交換（干渉）構造によって、言語使用や解釈が行われるというしくみをまず再確認した。その後、ひらがなとカタカナの使い分けによる意味の差異化現象を説明するため、音声系に仮名系を加えた「仮名・音声系」への拡張を提案した。

2つの系を統合する具体的なしくみについて論じるのは次の機会にゆずるが、本質的な方向性はこれまでと変わらないはずである。

そして石野(2017)のまとめでも述べたように小論でも、日本語だけが特殊な言語だと主張するつもりは全くない。むしろ基本的に多くの言語で同じ原理が存在すると考える。ただわれわれの原理による説明が必要な場面の頻度や、そのような使用傾向が多いか少ないかという問題であり、日本語はむしろそれを基本に想定した方が説明や記述の効率がいい言語だということである。この視点についても変更はない。

しかし、日本語では3つの表記が共存し用いられているという、世界にも稀な現実が存在する。そこから日本語表記の特殊性が生じていることは否定できない。

参考文献

- Saussure, Ferdinand de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris : Payot.
- 阿辻哲次 2003 『漢字三昧』 光文社 (新書)
- 阿辻哲次 2007 『近くて遠い中国語－日本人のカンちがい』 中央公論新社 (新書)
- 石野好一 1986 「漢字使用のしくみ 1」 *Sophia Linguistica*.20/21. (上智大学大学院言語学専攻紀要) pp. 251-259
- 石野好一 2017 「日本語における漢字使用のしくみについて」 『言語の普遍性と個別性』 第8号, 新潟大学大学院現代社会文化研究科, pp. 15-39
- 伊東ひとみ 2015 『キラキラネームの大研究』 新潮社 (新書)
- 井上ひさし 1993(96) 『ニホン語日記』 文藝春秋 (文庫)
- 井上ひさし 1990 『日本語相談 2』 (大野晋ほか著) 朝日新聞社

- 円満字二郎 2017 『知るほどに深くなる漢字のツボ』 青春出版社
- 大島正二 2006 『漢字伝来』 岩波書店（新書）
- 奥田博子 2017 「日本語の表記と読み方の〈不思議〉」 『〈不思議〉に満ちたことばの世界』
（高見健一他編） 開拓社 pp. 7-11
- 樺島忠夫 1977 「文字の体系と構造」 『岩波講座日本語 8—文字』 岩波書店
- 樺島忠夫 1979 『日本の文字』 岩波書店（新書）
- 金田一春彦 1973 『ことばの歳時記』 新潮社（文庫）
- 金田一春彦 2001 『ホンモノの日本語を話していますか？』 角川書店
- 金田一秀穂 2016 『金田一先生のことば学入門』 中央公論新社（文庫）
- 倉島長正 1996 『なるほどがってん日本語 101 話』 東京新聞社出版局
- クリスタル, D. 1992 『言語学百科事典』 大修館書店
- 黒田龍之助 2000 『外国語の水曜日—学習法としての言語学入門』 現代書館
- 現代言語セミナー編 2003 『つい他人に試したくなるもっと読めそうで読めない漢字』 角川書店
- 河野六郎 1994 『文字論』 三省堂
- 河野六郎・西田龍雄 1995 『文字彙眞』 三省堂
- 今野真二 2017 『漢字とカタカナとひらがな—日本語表記の歴史』 平凡社（新書）
- 笹沼澄子 1977 「失語症におけるカナと漢字の障害」 『言語』 1977年7月（大修館書店） pp. 66-74
- 佐竹昭広 1986 『古語雑談』 岩波書店（新書）
- 佐竹秀雄 2008 『日本語教室 Q&A』 角川書店
- 柴田武 2002 『その日本語、通じていますか？』 角川書店
- 柴田武編 1976 『朝日小事典—現代日本語』 朝日新聞社
- 柴田武編 1976 『ことばの意味 1』 平凡社
- 菅井保宏 2016 「隠語化される差別—カタカナの特性」 Asahi.com, 2016年7月1日
- 高島俊男 2001 『漢字と日本人』 文藝春秋（新書）
- 築島裕 1981 『日本語の世界 5. 仮名』 中央公論社
- 中田祝夫 1982 『日本語の世界 4. 日本の漢字』 中央公論社
- 中村明 2014 『日本語のニュアンス練習帳』 岩波書店（新書）
- 仲本秀四郎 1996 『知・記号・コンピューター』 丸善ライブラリー
- 西江雅之 2003 『「ことば」の課外授業—“ハダシの学者”の言語学1週間』 洋泉社（新書）
- 野村雅昭 1988 『漢字の未来』 筑摩書房
- 橋本萬太郎編 1980 『世界の中の日本文字—その優れたシステムとはたらき』 弘文堂
- 林大 1977 「漢字の問題」 『岩波講座日本語 3. 国語国字問題』（岩波書店） pp. 101-134
- 牧野成一 2018 『日本語を翻訳するということ』 中央公論新社
- 宮本忠雄 1973 「言語危機の病理」 『言語』 1973年9月（大修館書店） pp. 39-46
- 村田雄二郎・C. ラマール編 2005 『漢字圏の近代—ことばと国家』 東京大学出版会
- 森岡健二 1974 「漢字の層別」 『国文学論集 7』（上智大学文学部紀要） pp. 3-62

- 森岡健二 1988 「漢字の表意性と表音性」 『漢字講座 1』 (佐藤喜代治編) 明治書院 pp. 94-116
- 森岡健二 2004 『日本語と漢字』 明治書院
- 森岡健二編著 1969 『近代語の成立—明治期語彙編』 明治書院
- 森岡健二・柴田武編 1975 『シンポジウム日本語 4. 日本語の文字』 学生社
- 柳父章 1977 「日本語にとって漢字とは何か」 『言語生活 307』 1977 年 4 月 (筑摩書房) pp. 28-37
- 山鳥重 1976 「映像としての漢字—文字認識の心理過程」 『エピステーメー』 1976 年 3 月 (朝日出版社) pp. 158-169
- 山鳥重 1982 「書くことの神経学—Neurology of Writing」 『サイコロジー27』 1982 年 6 月 (サイエンス社) pp. 36-43
- 山鳥重 1998 『ヒトはなぜことばを使えるか—脳と心のふしぎ』 講談社 (新書)
- 山鳥重 2011 『言葉と脳と心—失語症とは何か』 講談社 (新書)
- 鷲尾龍一 2017 「文字と言語学」 『〈不思議〉に満ちたことばの世界』 (高見健一他編) 開拓社 pp. 2-6